

教育実践報告

令和の時代に、これからの初等教育に期待する

増田 吉史

Expecting the Future Primary Education at the Beginning of the Reiwa Era

MASUDA Yoshifumi

要 旨

2020年全世界が新型コロナウイルスの感染拡大で非常事態に陥った。日本でも小中高校は春休み前から臨時休校となった。松本大学も前期の開講を遅らせ、全ての授業をオンラインで行うこととなった。本稿では、松本大学教育学部設立前からその準備に関わり、2017年入学の教育学部1期生の成長を見届けてきた著者と著者のゼミ生の1期生5名の実際の活動を通して、コロナ禍以後の小学校教育への期待を述べた。

キーワード

教師の資質向上 教員採用試験対策講座 授業の達人 信頼される教師 学習指導要領

目 次

- I. 義務教育の危機
- II. 立ち向かう1期生たち
- III. この学生たちが初等教育の未来を創る
- IV. これからの初等教育
- V. おわりに

文献

I. 義務教育の危機

1. 研究主題

令和の時代に、これからの初等教育に期待する

2. 研究スタート時の日本

本研究スタートは2020年5月である。全世界が新型コロナウイルス(以下「コロナ禍」とする)の感染拡大で大変な事態に陥っている最中である。小、中・高校も休校が続いていた。松本大学でも5月になってオンラインによる遠隔授業が始まった。本学のみならず、多くの大学教員が、実はやってみると今までに無かった学生のよい反応に触れ、思った以上の教育効果を感じ始めている。コロナ禍が収束しても、もう元には戻れない。これは学校の在り方自体が変わる瞬間であった。

3. 学校教育現場の不安

「小1プロブレム」という言葉は「中1ギャップ」とともにすっかり定着した。小学校1学年の学級において、入学後の落ち着かない状態がいつまでも解消されず、教師の話を開かない、指示通りに行動しない、勝手に授業中に教室の中を立ち歩いたり教室から出て行ったりするなど、授業規律が成立しない状態をいい、最近は特に問題になっている。

東京都教育委員会は「小1問題の予防・解決」のために教員加配まで配置し、この問題に対応している。この問題は小学校だけに原因があるのでなく、それ以前の保育園幼稚園にも同じような現象が見られ問題になっていて、双方の連携の重要性が認識されている。確かに子どもたちにとっては、幼児から児童への階段は、結構その段差は大きい。チャイムが鳴り、時間割があり、6年生までの大勢の集団の中で、次々に新しいきまりごとを身につけなくてはならない。

それでも、小学校1年の担任はすごい。叱るでもなく、怒鳴るでもなく、日一日と児童が安定し、集団が変わり、小学生らしくなり、2学期の頃にはたくましささえも身につける。こうなると教師にとって1番授業がやりやすく、最も楽になり、指導していて思わず顔がほころぶ瞬間が増え、教師としても

楽しい学年となる。

それだけ小学校1年生1学期は担任教師にとって重要である。ところが、これが日本全国の2020年入学の1年生には無い。学校現場にとって未知の現象が待ち構えている、教師にとってもこんな経験は無く、再開されるであろう2学期の想像がつかない。

これもコロナ禍が教育部現場に新しい課題を与えた。学校が、教師がしつけないと日本の子供はダメなのか。ゼミ生に意見を聞いた。

4. 学級崩壊の中で育った学生達

第1期生の増田ゼミでは、2019年の時点で増田ゼミ生5名の研究は方向付けされ、一定のまとまりを見せていた。2019年10月に予定されていた学園祭でポスターセッションため会場作りをしたが、残念ながら当日は台風で雨風が強く2日間とも中止となった。

A:「教室環境は子どもを変える。子どもが生き生きする環境づくり」

B:「ピアノは数学。算数の教材作り」

C:「算数は数学ではないのか。算数と数学をつなげる指導」

D:「子どもの姿勢が悪すぎる。バレエで指導を受けた経験から」

E:「昔話を埋没させない。昔からの言い伝えや昔話を現代の教育に生かす」

それぞれわくわくするほどおもしろい研究主題で、その成果が楽しみであった。2020年に入り、オンラインのゼミとなり、なんとなく普段よりじっくり話し合える環境になったこともあり少し欲が出てきて、コロナ禍の中で学校教育をもう一度見直しておこう。初等教育の在り方を研究してみよう。そう考え研究主題を設定した。5名とも小学校教員になるのだから。

「まず自分が小学生だった頃、先生は何をしてくれたのか思い出そう」となった。しかし学生達は最初「ほとんど覚えていない」と主張していた。増田が小学校担任の時に子どもたちにしてあげた事をトピックのように語っていくと次々に思い出のである。そこで次週までに「私の小学校時代」をテーマにレポートを書いてもらった。その結果が以下である。ビックリである。一言も「学級崩壊を書くように」などとは言っていない。偶然の一致では済まされない。確かにゼミの最後に発言したゼミ生Aの

以下の発言にインパクトがあった。これに引きずられての一致ではあるが、内容はすさまじい。

ゼミ生A

私の小学校時代はすごく荒れていた。音楽の授業もままならず、受けていないに等しかった。(音楽だけではないかもしれない)私の5年生のときは、校長先生や教頭先生など4人くらいの先生が関わって授業してくれていた。そのため、担任の先生はたいしたことない先生だと思っていた。そういった情報は勿論地域にも広がっていく。そのため、地域の目が学校に対して厳しいものになっていった。私の祖父祖母も父母も「あの担任はダメだな」と口にしていった。祖父祖母が言っていたということは、ある程度の周りの人にも情報は伝わっていただろう。今考えると、地域の学校に対する目というのは厳しいものであっただろう。

では、なぜ私は先生になりたいと思ったのか。ゼミで話をしていくうちにわからなくなってきた。本当に先生になりたいのか。「先生=悪い」と思って成長してきた。そんな中で考えたのは、私は先生の先生になり、早く管理職や教育委員会に入り、教育を大きな視野で見て立ち向かいたい。(以上引用)

ゼミ生B

私たちが低学年の時に担任だった女の先生(以下A先生)はある日突然私たちの前から姿を消してしまった。急に娘さんがご病気になって、看病しなければならなくなったからだ。途中で辞めざるを得なかったA先生の苦悩は今ならわかる。でも、やはり1度だけでいいから私たちにお別れの機会を与えて欲しかったと思う。荷物を取りに来た時、引き継ぎの時、会える時はあったと思う。私は彼女があえて私たちに会わないという選択をしたように思う。(以上引用)

ゼミ生C

私の小学校3・4年生の頃は、俗にいう「学級崩壊」の初期のような状況が起こっていた。一部の男子が授業中に教室内を走り回ったり、教室から出ていたりということが3年生の時にあった。最初は担任の先生も引き留めるなどしていたが、授業の進行が遅れるためか、しばらくするとその男子たちをほっ

ておくようになった。授業中に遊びに行くことを許しているという感覚だった。授業を受けている他のクラスメイトも先生に対して口答えすることが多くなった。汚い言葉を使ったり睨みつけたりと、状況は悪化していった。私は、そんな男子たちや荒れている子を見てあきれると同時に先生をかわいそうだなと思う気持ちで過ごしていた。しかしある日、学級活動としてクラスのみんなど外で遊んでいた時、先生に反抗する子と先生が言い合いになり、先生が泣いてしまった。今考えると、先生も限界だったのかなと思うが、当時の私の気持ちは、その時に「この先生ではだめだ」という感情に変化した。その後も状況は変化することなく4年生になった。先生が変わり、少しずつ良くなっていていたのかとは思っていたが、一部の保護者が教室のビデオカメラを設置して監視するという時期があった。カメラがあることに気が付いた私たちは、「しっかりしないと」という気持ちになり問題を起すことは少なくなった。このことを考えると、当時の私たちは学校の先生、特に担任の先生をなめていたのだと思う。少なくとも先生より家庭で親に怒られることのほうを恐れていたということがわかる。(以上引用)

ゼミ生D

私の体験談ではなく、母の知人から聞いた話だ。母の知人の娘さん(小学校6年生)のクラスの話で、担任の先生は若い女性の先生だった。クラスで起こったことについては詳しく聞いていないが、ある女子のグループ(ボスと手下みたいな関係)が先生に反抗して、授業もままならず、修学旅行にも行かないと言い出した。女子グループ以外のクラスの児童は女子グループに従うしかなかった。担任の先生だけでは手に負えず、校長先生や教頭先生がクラスに入った。母の知人の娘さんが、小学校5・6年生の復習のテキストをやってみると、かなり出来が悪く、中学校では、他のいくつかの小学校が一緒になり、学習が心配なため、塾に通い始めた。(以上引用)

ゼミ生E

私の小学校での思い出を振り返ると、ゼミの中で誰かが話すように、先生との一対一での思い出はあまりない。特に5・6年生の先生との思い出はなかなか思い出すことができない。考えてみると、5年生

の時の先生はとても怖い先生であり、学級はまとまっていたのかもしれないが、個人的に先生に心を許して相談したり授業以外でたわいもない話をしたりすることがなかった気がする。また、6年生の時の先生は笑顔のない先生だということを覚えている。実際に卒業アルバムを見ても笑顔で写っている写真がない。もちろん自分自身のことを話したり、先生と楽しく会話をしたりした記憶がない。5・6年生の時期は今考えると、少し悲しい。(以上引用)

5. 義務教育の崩壊の兆し

この1期生達と教員採用試験対策講座を担当してつくづく思うのは義務教育の混乱である。学力を保障されないまま大学までたどり着いたのはいいが、自尊心まで深く傷つけられた学生たちもいて、そこからの立ち直りから指導を始める必要がある者も少なくない。義務教育学校の教育にかかわってきた者として辛いものがある。

松本大や長野県の話をしているのではない。日本中何処でも同じ話を聞く。義務教育の3極化が進んでいるのだ。全国の小学校において2020年4月は新教育課程による学習指導要領が完全実施される年である。1つ目のグループは生きる力を育む各学校の特色ある教育活動の展開が求められるなかで、主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善に真剣に取り組む、文科省や各県教委や市区町村教育委員会の研究校として、日々授業研究を行っている学校である。2つ目のグループは学習指導要領総則がどんなに教育改善の方向を具体的に示そうと、何処吹く風、日々何も変わらない日常をすごそうとじっと身を潜める学校である。3つ目のグループは学級(学校)崩壊に陥り機能不全になっている学校である。これが結構多いのである。都道府県教育委員会は学級崩壊を未然に防ぐ方策など研究に余念が無いが、その出現率はやたらには公表しないし、教育関係の新聞等も様々な研究を引用して数値は書くがはっきりしない。その中でここでも何処の都道府県とは書かないが、北から順に行くと、例えば小学校の年間の学級崩壊出現率は14.2%としている研究もある。しかしそんな調査を待つまでもなく小学校現場から生々しい話を聞くと、とてもそんなものではないと実感している。

II. 立ち向かう1期生たち

1. 令和2年に

テレビでは「小学校教科書クイズ」なる番組が流行っている。一流大出身のタレントが四苦八苦している様がおもしろらしい。長年小学校現場にいた者としては「何でそんなことを知らないんだ」「小学校の時に何をしていたのか」と突っ込みたくなる。小学校1年生クイズ「十日」は「とうか」か「とおか」かなどである。

テレビに突っ込んでいる場合ではない。愕然とさせてくれるのが学生達である。模擬授業で板書をさせると「どうしてそんな書き順が出来るのか」それこそ「小学校の先生は教えてくれなかったの」と聞いてみる。書き順は厳しく指導したはずだ。「左右」「上下」、国語だけではない「50」。その都度「おい！」と声をかけ、その場で「スマホ検索」させる。スマホに正解が表示されると学生達は声をそろえ「驚きの声」を上げる。その姿にこちらが驚く。

それでもあきらめずに学生達はよく勉強する。教員採用試験の過去問や模試では、1～2年生の頃は「D」とか「E」判定である。「殆ど合格の見込みがない」レベルだ。「今は30点でも40点でもいい。次までに50点、60点に上げればいい」と励ます。「C」になりちらほらと「B」が現れる。この学生達はすごい、4年生になる頃には「B」に混じり「A」が現れ始める。「絶対に落ちることはない」レベルだ。小学校の勉強は小学校だけでやるのではない、小学校の勉強は「いつしてもいいのだ」と思い知らされる。

1期生達は1次試験に65%(複数受験あり)通過とは塾的に言えば高合格率である。学部スタート前は「1名でも受かれば」と言っていた方が今は「当然の結果」と胸を張る。

III. この学生たちが初等教育の未来を創る

1. これからの教育を立て直す力となれ

この課題を改善するのは、これからの教員に期待するしかない。2020年は松本大学1期生が教員採用試験に挑戦した。その努力は絶賛に値し多くの学生

が2021年4月から教壇に立つことになった。この学生達が、教員採用試験対策講座で何度も論作文や面接の指導を受け、その時に解答した通りの教員になってくれれば解決は確実であり、令和の時代の初等教育の未来は明るい。子どもの多様性を認める教師、子どもの個性を生かす教師、地域家庭から尊敬を受ける教師…である。

2. 学校教育現場のオンラインの推進役に

やがて小・中・高校でもオンライン授業は必須となり始まるであろう。大学と同じ現象が起こることは時間の問題だ。

社会や保護者の意識も変わってしまった。子どもたちを教室(密閉)空間に集め(密集)させ一斉授業をし、子ども同士や教員が近い(密接)距離で活動するという、日本の学校独特の教育文化はそれ一色という昔は戻ってこない。日本の学校の在り方、教員の働き方を大きく変えていくチャンスが到来した。

学校の働き方改革、特に義務教育段階の改革は難しいと感じていた。新型ウイルス問題対応以前はである。つまり多くの大学で遠隔授業の開始当初、大学教員を中心に、オンライン授業の準備のため悲鳴を上げる瞬間はあった。

さあ小学校の出番だ。なぜなら特に義務教育学校教員は対面授業を前提として大学(教職課程)で養成され、さらに学校現場に入ると、より強固に実践を積んできた。義務教育学校の多くの教員は、オンライン授業に対する知識や経験など持っていない。

これからも、学校や教員の仕事として、知識の活用や思考力の育成を進めることに変わりはないが、さあここで学校や教員はどう変わるべきか。オンライン授業をどう進めるかというテクニク的な問題ではない。だいたい遠隔授業なんて、やってみると最低限必要な基本操作だけ確実に習得すれば、それで充分であるのだが、残念ながら全国の小学校の便場はICT化が進んでいなかったことが判明した。義務教育学校教員にとって、オンライン授業の環境整備やコンテンツ作成は、最初のうちは民間企業や専門家に任せればよい。学校や教員がやるべきことは何か。それは、通常の対面授業の改革だ。基本的な知識はオンライン授業で教えることになるだろう。

その上で教員は、対面授業で知識の活用や子ども同士の協働による思考力やコミュニケーション力の育成を中心とするものを中心に進めることになる。そのように授業の醍醐味が大きく変わる予感がする。

IV. これからの初等教育

1. 教職課程の未来

さあ、このような時代に小学校教師を目指す学生に、再度、向き合う必要がある。問題解決力を身につけさせ、多様化する子どもや保護者たちに適切な対応できる力を育成することには変わりはない。このためには大学(教職課程)はその内容を、義務教育学校現場とともに変革し、新しい実践的演習を多く作り上げていく必要がある。

そこで2020年度の研究の方向を大きく変更することにした。もちろん従来の研究成果を捨てるつもりはない。

教科指導と並んで重要である学級経営に焦点を当てて研究を継続してきた(参考文献参照)。ずっと「教科指導(算数科)と学級経営」を研究主題としてきた。これを本年度(令和2年度)も変えるつもりはない。この研究主題は小学校現場の研究支援を続け、学生の教職実践力を育てる方策を開発する研究であったからだ。これからも、現場の教員の生の声や悩みをもとにこの研究を継続し、学校現場の校内研究等の支援を通して考察することにより、教師を目指す学生に生きた課題解決力を身につけさせたい。

2. 学校現場から。卒業生達の悲鳴

別大学ではあるが卒業して小学校教員になっている若い教師達からもSNSが届く。

こんな写真とともにである。

「先が見えない。コロナも見えない。見えないものばかりで、みんなそれぞれの立場で、不安もストレスもたくさんあることと思う。新年度が始まって3日。正直子どもたちのこと、保護者のこと、教員のこと…上の人たちはどう考えているのか。ちゃんとみんなのことを思ってくれているのかわからないような指示がとんできて驚きの連続。先生は子どもが来なくて暇でしょ、学童みたいな受け入れも余裕

でしょ、とか思ってる人がいたら、指示が出る度(しかも急に出される)に現場は大混乱で、対応に追われていることを知ってほしい。そして、日々変わっていく指示に、今まで時間をかけて準備していたものが、全く使えないものになる。考えた過程は自分の力になるし無意味とまでは言わないけど、正直無駄になる現状を受け入れなきゃいけない。でも、先が見えないからこそ、今どう動けるか、どう考えられるかで、未来は大きく変わると私は思う。市は分散登校を決め、毎日クラスの3分の1ずつ学校に来ることになった。こんな状況だからこそ子どもたちにできることはなにか。楽しいことができないか。普段できないことができるかも、とワクワクしながら考えている自分がある。また、周りの人(職員)とたくさん話して笑いあってつながる、あたたかい雰囲気、明るい環境をつくっていくのも、今だからこそできる。より一層仲を深めることができると思っている。この先は見えないけど、今を楽しめば未来に繋がるなにかが残せるかもしれないし、きっと楽しいと信じている。乗り越えられない試練はないなら、楽しんで乗り越えてしまえばいい。」(以上引用)

別の小学校教員からは、

子どもたちが黒板に残してくれた。急に学校が休校になった3月の6年生の教室である。

ゆっくりと別れを惜しむ間もなく臨時休校に突入



写真1

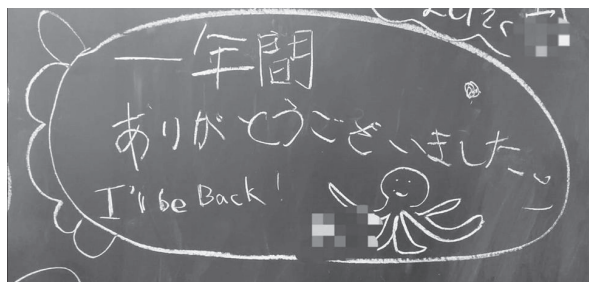


写真2

してしまった。かろうじて縮小型の卒業式は出来た。「金曜日は学年全員からのサプライズ、本当に嬉しかった。教室で思いっきり泣いた(正直泣くことなんてないと思ってた)。「黒板にたくさん書かれた子どもたちのメッセージのなかに「I'll be Back!」の文字が。市は2週間休校という判断だが、正直どうなるかわからない。あと少しでいいから一緒の時間を過ごしたいです。お願いします。

小学校生活最終日。「人は心が原動力だから。心はどこまでも強くなれる！」(以上引用)

このときにはこんな文章のメールだった。「異動や一人暮らしなど、生活が大きく変わった2019年。あっという間の一年でしたが、新たな出会いもたくさんあって、とても充実した一年だったと思います！2020年もさらにたくさんのお話を吸収して挑戦して、何事も楽しんで過ごしていきたいです。令和2年もよろしくお願ひ致します」(以上引用)

3. 授業の達人

松本大学のやがて卒業する1期生には是非、このように子どもと密接にふれながら、常にいい授業をして欲しい。「授業の達人」になって欲しい。どんな世界にも達人がいる。当然、学校の世界には「授業の達人」がいる。今や少数になってしまっているが確実にいる。日本の学校、特に小学校の世界ではこの授業の達人こそが学校を支え後輩教師たちを育ててきた。それが日本の小学校のよき伝統であり、学校という職場が若い教師たちにとって勉強の場、修練の場となっていた。そこで育った教師たちがさらに後輩を育てる役目を果たしていく。教育学者たちは「授業は技術ではない、学問の裏打ちこそ大事だ」



写真3

と主張するが、その度ごとに教室が荒廃し、学力低下が止まらない。

子どもと接し、子どもを育てるのは教育課程でも、教材でもない。教師そのものである。教師が自分の授業技術を磨き、子どもたちにとって魅力のある授業を展開できない。

4. 大きく見る力

様々な価値観をすべて腕の中に入れて、違いを気にしない子どもの集団を作りたい。

不平等…文法的には「非」「不」はともに「打ち消し」の意味で用いられる“接頭語”であるが、「非」の方は完全否定の打ち消しであり、「不」は、“不足”的な要素を持つと言われている。この他に「無」「未」があるが、平等は「不」である。

「不平等(inequality)」という用語は経済学で説明されることが多く、経済学で「平等」「不平等」などと言っている場合は、あくまで数値的な側面について述べたに過ぎない。経済学上の「平等」「不平等」は数字に換算できる要素だけをとりえて判断しているが、公平か不公平かは道徳的基準がなければ判断できない。

教育現場ではしばしば「平等」が重んじられ、非教育的場面に遭遇する。この現象を「逆」平等とか「悪」平等とかで表現したい。

算数教育研究の場では、このことはよく語ってきた。例えば30名の学級で一斉指導、画一的指導を行う場合は、平均的な児童の進度にあわせる。進んでいる児童には待ってもらい、遅れている児童には我慢してもらおう。これが一見、平等である。

生徒指導において、小学校ではよく「月目標」を設定し、「天気の良い日は外で元気に遊ぼう」の標語をよく見かける。休み時間になると教員が分担して教室や校舎内に残ってる児童に声をかけ、全員を外に出すよう指導を徹底する。

ある日、担任教師は教室で連絡帳の処理をし、その脇で一人の女子児童が本を読んで休み時間を過ごしていた。教室に戻ってきた児童は、その児童を見とがめたりしない。理由を聞いたりもしない。教師の指導に対し「不平等だ」と攻めたてたりもしない。そういう児童、そういう学級を作りたい。

事例の女子児童は「光線過敏症」と呼ばれる太陽

光にさらされた皮膚に赤みや炎症、かゆみを伴う皮疹(発疹)ができるのが特徴の別名「日光アレルギー」とも呼ばれる病を持っていた。特に他の児童はそのことを詳しくは知らない。

ある日、算数の宿題が出た。今日は少し分量が多かった。一人の児童に対し、半分しかやっていたので、「最後までしっかりやるように」と励まし強めに指導した。次の男子児童は1割しかやっていたが、担任教師から大いに褒めた。この事例の男子児童は学習障害があり算数が苦手である。今回はかなりよく頑張ってきた、児童は鼻高々である。そのことで児童たちは担任教師の扱いが「不平等」とは言わない。そんな学級経営をしたい。そういう学級の中では、どんな立場でも児童達全員が安心であり安全である。「不平等」ではなく、「悪平等」「逆平等」を生まない学級経営と言える。

5. ほめる力

単に口だけの褒め言葉等、高学年になるほど通用しないし、長続きしない。難しい課題をやり通してから褒める。苦勞の末に正当に褒められる言葉はうれしい。学級崩壊の学生達の報国を見ても、「小学校担任の成否は高学年女子のグループをどう扱うか」や「他人様(先生)の前より親の前でいい子を演じるこどもたちの存在」。少なくとも少し前は、「他人様の前で恥をかくな。家の中ならいい」という価値観があった。今の子供たちは逆である。先生の前ではダラダラするが、親の前ではきりっとする。先生の前では間違えても平気だが、親の前では間違えたくない。いつの頃からか逆転したように思う。

「学校ではこういう行動があり注意しています」などと担任教師が言うと、親は目を丸くする。親は不思議そうな顔をし、同時に担任教師に不信の目を向ける。多くの児童が家では「いい子を演じている」のだ。この食い違いが学校不信を招くことの始まりであった。

この解決方法は、逆手に取ることである。モンスター的な親が激しく苦情に来て、「家ではそんなんですね。学校ではこういう行動をして素晴らしい姿を見せています」などと担任教師が言うと、親は目を丸くする。親は不思議そうな顔をし、同時に担任教師に信頼の目を向ける。

V. おわりに

謝辞

教育学部開講の2年前頃。2015年だっただろうか。設置や課程認定の作業中を住吉松本大学長(以下住吉氏という)はよく十文字学園女子大学の学長室で確認作業を行っていた。ある日横須賀薫十文字学園女子大学長(以下横須賀氏という)に呼ばれ、「学校教育学科の最終の詰めで実務系の人物を見るので、あんたは学校現場をよく知っているから隣にいてくれ」と言われ、二人の学長の会話を少し離れた位置からぼんやりと聞いていた。一度も口を挟む余地もなく終了し、「これで松本大学に学校教育学科が誕生するんだ」と漠然と思っていた。

ところが数日後再度住吉氏が訪れ、「文科省からの多くの人物にだめ出しがあり1年見送るしかないか」と話されていた。ここで初めて横須賀氏は「松本大は学科ではなく学部の立ち上げだった」と意識し、「学部ならそれは無理だ」という言葉が印象的だった。やり直し作業が始まり、突然横須賀氏が「あんたが行けば全部埋まる。行ってあげなよ」の声、「いいんですか」の住吉氏の声に、増田は思わず「宜しくお願いします」。一瞬の出来事だった。

以上の経緯は増田の大いなる勘違いかも知れない。二人の学長からは全く違うと言われるかも知れないが、ぼんやりしていただだけの増田はそう認識した。以来住吉氏には大変にお世話になり、管理職ではない身軽な4年間は楽しかった。こんなに毎日が楽しかったのは、新卒の10年間以来である。

教育学部の先生方にも大いにお世話になった。模試の模試の解説(フィードバック)では、割り振ったら一人5分から10分しかないのに、多くの準備をされて解説される姿に感激の連続であった。面接指導でも丁寧に学生を指導して下さった。なんていい先生方か。そしていい学生ばかりだった。4期生までだが印象に残る。

以前に横須賀氏から「私はこれで仙台に戻るが、あんたはどうする」と聞かれ、「私は泳ぐのをやめると死んでしまうマグロです。止まると一気にだめになる人間です。仕事を継続したいのでどこかいい職場があったら紹介ください。どんな地位でもいい」とお願いしていた。それを心にとめていて下さったの松本行きになったと思う。横須賀氏には感謝の

言葉も見つからない。この4年間松本の景色を満喫した。

それでも依然マグロである。松本は終わってもまた何処でもいい初等教育のお手伝いができたらいいと考えている。増田を必要としてくれるところなら日本国中何処にでも行く。身分は時間講師で充分である。

なお、授業に関する学生の感想を掲載している部分は、倫理的配慮を行った上、掲載していることを申し添える。

文献

- ・ 小学校学習指導要領解説総則編，文部科学省東洋館出版，(2017).
- ・ 増田吉史，『小学校教師のための学級経営テキスト作成』十文字学園女子大学児童教育実践研究，(2008).
- ・ 増田吉史，『教科指導を中心とした学級経営のあり方』十文字学園女子大学児童教育実践研究，(2009).
- ・ 増田吉史，『小学校現場の研究支援を通して、学生の教職実践』十文字学園女子大学児童教育実践研究，(2010).
- ・ 増田吉史，『教科指導と学級経営 インシデントプロセスメソッドを活用した学級経営法の授業構築』十文字学園女子大学児童教育実践研究，(2010).
- ・ 増田吉史，『新座市立八石小学校とともに』十文字学園女子大学児童教育実践研究，(2012).
- ・ 増田吉史，『これからの授業のイメージづくり算数科指導関連科目のテキストとして』十文字学園女子大学児童教育実践研究，(2013).
- ・ 増田吉史，『教職実践演習・学級経営テキスト作成』十文字学園女子大学児童教育実践研究，(2014).
- ・ 増田吉史，『学生とともに「これからの算数教育のあり方」』十文字学園女子大学児童教育実践研究，(2016).
- ・ 増田吉史，『関連科目の授業を卒業研究に生かした実践』十文字学園女子大学児童教育実践研究，(2017).
- ・ 増田吉史，『何のための算数科「算数科概論」授業実践を通して』松本大学教育総合研究創刊号，(2017).
- ・ 増田吉史，『教職課程学生とともに創る算数教育Ⅰ(小学校1・2・3年生)』松本大学教育総合研究第2号，(2018).
- ・ 増田吉史，『学生とともに創る「教育実践特講」～子どもや保護者から信頼される教師を育成する授業の創造』松本大学教育総合研究第3号，(2019年).